

# ほとけの混和会だより

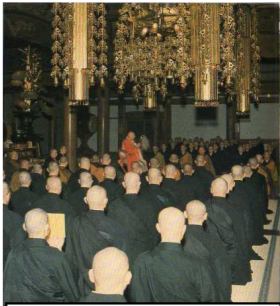
平成二十七年六月

東光院

仏の混和会

第112号

## 永平寺にて他宗との交流



上記の写真は永平寺のパンフレットより引用

永平寺、そこは、「サラサラ」と流れる小川のせせらぎや、小鳥達のさえずりが静かな聖地をかもし出し、おりました。

すると「ドン」、けたたましい太鼓の音が一打、山内に響き渡り、静寂さは、打ち破られます。

「何だろう」、しかし太鼓の音はそれっきり、又静かな鳥のさえずりが静寂さを演出します。

しばらくして、どこからともなく「チーン」と静かな鐘の音が小鳥たちの演出に相づちを入れる。

「なんとも心地良い、ハーモニーだろう」と酔いしれていると、「ドン」又、山内に響き渡る太鼓の音、すると今度は蛙が「ケロケロ」と相づちを入れる。

「ドン、ケロケロ、チーン、パイパイ」「ドン、ケロケロ、チーン、パイパイ」霞のたなびく翠の谷間で、まるで大自然のオーケストラが、仏法の真理を奏でる生演奏のど真ん中に座して居るようでした。

ネーネーお坊さん 福井の永平寺を開かれた人は道元様ですよ、道元様はどのような教えを説いて下さったのですか？



そうじゃな、私が道元様を語るのにはあまりにもおこがましいのじゃが、私の好きな道元様の言葉をいくつか並べてみるね、先ず一番は、次の言葉なんじゃ

【眼横鼻直】「がんのうびちよく」とよむのじゃよ。道元様が二四歳の時、「仏法を求めて入宋されたのじゃが、「空手」いわゆる、からで帰って来られたのじゃな。

最澄様も空海様も入唐されて沢山の経典や仏具を持ち帰られたが、道元様は仏法を求め中国に渡ったけど仏法らしきものは何も無かった。ただ人は皆、眼は横に、鼻はたてに付いている事が解ったと言われたのじゃよ。

「へー、そんなのだけれども知っている事でしょう」そうなんじゃ、だれでも知っている当たり前のことなんじゃが、この当たり前の事が見えなくなっているのが私達なんじゃよ。

「へー、何か解らないよ。」そうじゃな、「柳は緑、花は紅」と言つて、柳は緑が良いですね、花は紅がとも良いですねと、素直な気持ちで、大自然の成り立ち生老病死等、物事全てに於いて、とらわれ、こだわり、執着、偏見を捨てて、あるがままに受け止める

事によって、大きな安心が得られますよ、と言っているように思えるのじゃよ。【莫妄想】「まくもうそう」と言う言葉も良いね。「いらん妄想を抱きなさんなよ」と言う事なんじゃ。

この度の研修会へ行く事に関しても、曹洞宗の本山である永平寺に行ってみたいから出席の決心をしたのじゃ。しかし頼りに成る人が居ない、なんと自己紹介しようか、意見発表をどうしようかなど、己自身の心が、かつていらん妄想を抱き、己をしばり、がんにがらめにして、己自身を苦しめていたのじゃよ。毎日不安だったのじゃが九日の朝、東光院の本堂でお勤めしていたら、阿弥陀さんが「楽しんで行つてきなさい。あるがままがいいんだよ」と私に話しかけてくれたような気がしたのじゃよ。

「そうだ、眼横鼻直、莫妄想、あるがままでいいんだ。己を偽る必要も無く、飾る必要も無い」と己に言い聞かせたとたん、身も心も楽になつて十日の早朝に、東光院を出発したのじゃよ。

【仏道を習うと言うは、自己を習う成り、自己を習うと言うは、自己を忘れる成り】これも良いですね。

私達は、わがままという、己の我を振りかざし、己の価値観に執着し、己の思うように事が進まない、愚痴をこぼし、怒りを覚えた、迷い苦しみを招いてしまうのじゃよ。自己中心的な自己を捨てていけば、迷いも災いも招かずに、他を思いやる慈愛心に目覚める事ができるのじゃよ。心して歩んで行こうね。 亮観拝

## 日本の仏様

No. 2



前号では仏様は4つの部類に分類できると書かせていただきました。今回より、各部の仏様の特徴について部類ごとに紹介していきます。

### 一、如来

現在の仏様は、仏教の教えの起原となったお釈迦様こと、釈迦如来をモデルに様々な仏様が形作られていきました。この如来には身体的特徴が經典によって定められており、大きな特徴を「三十二相」、より詳細にしたものを「八十種好」と呼ばれています。「三十二相」には、全身が金色で三十二相には、全身が金色で光を放し輝き、頭の肉が盛り上がり、額には長く白い毛が渦を巻き、大きなホクロのように成っている。と言った現代の仏像に見られる特徴から、身長と両手を広げた長さが同じで、手が膝に届き、何を食べても最上の味に感じられる舌を持ち、伸ばすと髪の毛の生え際まで届く、足の裏が平らで扁平足である、などの特徴が書かれています。

八十種好には、髪が青く、眉毛が瑠璃色をした細い三日月型。耳が長く垂れ下がり、耳た

ぶに穴があいているが鼻の穴が見えないなどが書かれており、どちらも人間離れした様子が事細かく示されています。

これらは、インドでは仏教が発生する以前から偉人には、普通の人は異なる性質があると信じられてきたことが、由来となっていると考えられています。

また、如来の服装は出家した者の姿であるため、装飾品のない質素な身なりをしています。

法衣の着方には、両肩を覆う着方と、右肩を出した着方があり、両肩を覆った姿は威儀を整えている時の着方で、右肩を出す時は相手に恭敬の意を表している着方です。頭髪は螺髪と呼ばれるパンチパーマのような髪型をしていきますがこれは髪が丸まり巻貝のような塊となつてきています。

### 余談

頭のコブは仏像が造られるようになった当時の貴族の髪型、今で言うお団子ヘアが頭のコブのモデルとも言われています。



釈迦如来(涅槃像)

亮澄拝

## 喜多院へ行ってきました

関東地方は梅雨に入り天候が優れない日が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。

私は先日、学生時代の先輩を訪ねて、川越の喜多院へ行って参りました。喜多院は徳川幕府に使えた天海大僧正が住職を務め、当時は比叡山に匹敵する規模の寺院であったことと知られています。

さて、喜多院は通称、川越大師ともよばれておりますが、それではこの川越大師とはどのような人物であったのでしょうか。全国には佐野厄除け大師に川崎大師、西新井大師と大師を祀るお寺はいくつも

ありますが、これらは大きく二人



の人物のことを指しているのです。すなわち、天台宗系の元三慈恵大師良源と真言宗系の弘法大師空海です。そもそも大師の名は、優れた功績をのこした僧侶に對し、時の天皇が送った諡号であり、天台宗では宗祖伝教大師最澄や慈覚大師円仁なども該当します。そして慈恵大師良源とは、第八代天台座主を務めた平安時代の僧侶で、優れた学識を持ち比叡山の復興をなされた方でありました。また、人並み外れた威徳を備えたことから、観音菩薩の化身として民間に信仰されてきた僧侶なのです。

## お知らせ

私事ですが、先月より調布にありますが深大寺にて助法させて頂くことになりました。深大寺も元三大師を祀るお寺ですので、近くへお越しの際はお参り頂ければ幸いです。合掌

「元三慈恵大師良源」通称、元三大師と言われている。 亮敬拝